

機能しているものだけでも35を数える。ASEAN諸国のこれら国際政府機構への加盟率は非常に高い。タイは28のIGOsに加盟しており、最も高い80%の加盟率を、そしてマレーシア、フィリピン、インドネシアもそれぞれ、76%、73%、67%と高加盟率を示している。非ASEAN諸国の平均加盟率が10%程度であることを考えるとASEAN諸国のアジア国際機構への積極的な参加が浮かびあがってくる。また各IGOsが目的とする”問題領域”(issue area)の広狭を見た場合、多くのアジア地域機構が1ないしは2、3の問題領域を扱う単一目的組織であるのに対し、ASEANのそれは政治、経済、通信等、IGOs中最も広い分野に及ぶ多目的機構を構成している。そして、ASEANが東南アジアというサブ・リージョンに位置し、自律的な政治・経済秩序の形成に、その国内政治・経済の脆弱性のゆえに極めて高い利害関係を共有し、その実現をめざす諸国から構成されていることは、他のアジアIGOsから一線を画すことになっている。アジアという主に第三世界諸国から構成される地域にあって、ASEAN諸国はASEANという核機構を拠点に多様な機能面の協力関係を構成することによってアジアの協力・統合関係の推進に重要な役割を担っているといえよう。

ASEAN地域主義を観る場合に、その発展に果たす域外からのインパクトを過大に評価し、その自律性と内在的論理を無視しがちである。しかし、ASEAN生成の系譜をたどったときに、その背景には間接的にしろ、”バンドンの精神”を起点とする反植民地主義と脱植民地主義ならびに強烈なナショナリズムとリージョナリズムが看取されるし、他方、直接的には東南アジアというサブ・リージョナルな政治・経済・文化空間の中で、自らの運命を自ら決することができるような地域秩序形成に向けての内発的な努力がなされてきたことがわかる。SEAFET(東南アジア友好経済条約、1959)構想、ASAS(東南アジア諸国連合、1960)構想、そしてASA(東南アジア連合、1961)の結成とMaphilindo(1963)結成という内発的な努力の継続の上にASEANは成立したのである。独立後、国内的には、長き植民地時代に禍根を持つ、民族・宗教対立と政治・経済的脆弱性を含み、域内的には相互の新興ナショナリズムによる軋轢が国境・民族紛争を生起させ、さらに、域外からは東西両体制の対立的二極構造と伝統的な中国の脅威が地域の政治秩序を大きく決定づけている状況の下で、ASEAN各国は国民政治・国民経済・国民社会・国民文化を創りあげるという至難の課題を抱えていたのであった。

ASEANの誕生はASEAN諸国にとって、当初は地域の安定と平和と協力のシンボルとして機能し、後には、域内における、そして域外に対する政治・経済秩序形成システムとして発展してきたのだった。それは即ち、国家として政治・経済的自立の達成をめざすASEAN諸国にとって、不可欠な要件なのである。

DEVARAJA論

岩本 裕

devaraja という語はカンボジア語の kamraten jagat ta raja と同義語と解され、'dieu-roi' と訳され、カンボジアのみならず東南アジアにおける神王思想を代表する語として拡大解釈されてきた嫌いがある。devaraja を 'dieu-roi' と訳することは、この複合名詞を同格限定複合語と解釈するものであり、インドにおける解釈にはない。インドでは古くから10世紀ごろまで「神の王」と格限定複合語と解されて、インドラ神のことである。後に南インドの碑文に於いて Siva 神、Visnu 神が devaraja と呼ばれているが、これはやはり「神の王」としての解釈に

基づく。

devaraja という語はカンボジア碑文では Sdok Kak Thom 碑文 (K235) に 3 回見られるだけで、v.61 および v.63 の devarajasya arcam、devarajarcana- の場合は 'dieu-roi' と解することも可能であろうが、v.29 の siddhirvahantih kila devarajabhikhyah (碑面 -khyam) vidadhre 「siddhi (「悉地成就」すなわち密教でいう「即身成仏」) をもたらす、devaraja という〔密儀〕を執行した」とあって、到底 'dieu-roi' とは理解しがたい。しかも、Sdok Kak Thom 碑文において、devaraja の語は僅か 3 回見られるのに対し、kamraten jagat ta raja という語は実に 23 回見られる。この碑文の第 3 面 56 行を見ると、クメル語で「Paramesvara 陛下 (=Jayavarman II) は都城 Mahendraparvata に kamraten jagat ta raja を安置した (prati-stha)」と記され、'dieu-roi' の解釈は到底考えられない。Kamraten jagat は Skt. jagat-pati 「世間の主」の訳で、インドでは Mahabharata 以来 Siva 神の異称である。ta は現代カンボジア語 tha または kuitha 「すなわち」に該当するとして、「王者である Siva 神」と理解され、'dieu-roi' の意に解せられることも可能である。しかし、devaraja に関しては v.29 の記事がその解釈を拒む。すなわち、vv.26-27 に Hiranyadama という婆羅門が司祭官の Siva-kaivalya に siddhi を教えたと記し、次いで v.28 において 4 種の sastra (論典) を教え、そして v.29 において「論典の精粹を抽出して (samuddhrtiya sa sastrasaram)、実に devaraja という siddhi をもたらす〔密儀〕を執行した」とあるのであるから、4 種の論典の内容が問題である。この 4 論典は Siva-Sakti Mysticism の文献と考えられるが、詳細不明である。

次に注意すべきは Sdok Kak Thom 碑文の v.35 から v.62 を見ると、Sivakaivalya を初代とし 9 代の Sadasiva (この碑文の建立者) に至る purohita の家系が見られるが、代々「妹の子」(svasriya) とか「妹の娘の息子」(bhagini-suta-sunu) などと記され、この purohita たちは結婚していなかったことを示すと考えられる。しかも、v.74 に依れば Sadasiva は Suryavarman I (1010-1049) によって皇后の妹と結婚させられ、Khlon karmantara eka (内大臣または侍従長) にされたと、むしろ痛恨の思いをこめて記している。このことを併せ考えると、初代 Siva-kaivalya から 8 代 Sivacarya までの 8 人の purohita は結婚していなかったこと、そしてその祭神は Sakti (女性神格) であり、その職務は密儀に関与していたことを推察させる。しかも、Sadasiva はクメル語の部分に結婚したあと家長として kamraten jagat ta raja の purohita であると記される。従って、devaraja と kamraten jagat ta raja とを同一視することは到底できない。

愛国愛郷華僑の建前と本音

市川健二郎

従来の華僑史観には、1. 一世僑胞は余生を祖国ですごしたいと望むが、二・三世華人は出生地社会に同化し骨を埋める覚悟をもつとみる説、2. シンガポール国民は伝統中国性を避けて東南アジア性を求めているという説、3. クリオール文化 (二世の中間文化) はメスティーズ、ババ、プラナカン各社会で異なる変様を示したと説く説などがある。これらの現住地文化への変様説に対して、筆者は 1985 年夏に踏査した福建華僑郷土の実態調査資料にもとづき、精神生活面における華僑の伝統中国文明の持続性という新側面を強調したい。

拙著「陳嘉庚」(1984年)を批判したアモイ大学南洋研究所の諸氏は陳嘉庚を愛国愛郷華僑の